

北魏における滎陽鄭氏

窪 添 慶 文

1

北魏政権により「四姓」のひとつとして認定され、その門閥としての地位が唐まで続いた滎陽鄭氏についての研究は、これまでも少なからずある。矢野主税氏は漢代から唐代までの鄭氏について詳細な検討を行っておられるが、氏の場合、貴族（この場合には鄭氏）が寄生官僚であるか否かに主たる関心があり、鄭氏の動きを当時の政治的な動向の中に位置づけるという点では物足りないところがある。⁽¹⁾ 魏晋南北朝時期の貴族の存立基盤を郷里に求める谷川道雄氏の場合は、氏の理解する貴族のあり方とは矛盾するかの如き側面を示す鄭氏について、孝文帝頃を境として自らの基盤と遊離しがちになって行く傾向として把握するところが、最も傾聴すべき点であり、政治的な動向面での分析面については、発表媒体の關係もあろうが、なお検討の余地を残しているように思える。⁽²⁾ 筆者もかつて北魏における漢人貴族のあり方の中に鄭氏を位置づけようと試みたことがあったが、鄭氏そのものの分析には十分でないところがあった。⁽³⁾

近年になって陳爽氏は北朝政治における漢人大族のあり方について優れた研究を発表し、大族の事例研究のひとつとして鄭氏を扱われた。⁽⁴⁾ 陳氏の論ずるところには体系があり、多くを首肯できるが、南朝宋における鄭氏のあり方を検討に取り込むことができるなど、なお、補うべきところが残されているように思われる。また韓樹峰氏は南北兩朝の狭間にある

地域の豪族のあり方を論じ、その一環として鄭氏にもふれられた⁽⁵⁾。しかし、分析は北朝領域下にある鄭氏には及んでいない。

本稿は、北朝における鄭氏の政治的な行動に込められた自他の期待と、それを支えたものをできる限り詳細に分析することを目標とする。なお、鄭氏系図と鄭氏の活動に関わる地図を文末に付すので適宜参照していただきたい。

2

滎陽開封に本貫をつなぐ鄭氏が北魏の官僚としての姿を現すのは比較的遅い。それは彼らの居住する滎陽が北魏領に入る時期と深く関係するからである。

永嘉の乱後に華北の名族で故郷を離れるものは少なくなかったが、鄭氏にもその動きがあった。「滎陽鄭文公之碑⁽⁶⁾」には、「有晋^{きよ}竟^あわず、君道陵夷し、(劉) 聡・(劉) 曜虔劉するに値^あい、地を冀方に避け、隠括して全を求め、静居して自逸す」とある。鄭略は後趙に仕え、その子は後燕、孫は燕(後燕もしくは南燕)に仕えた。滎陽は後趙、後燕の領域に含まれている。一時冀州方面に避難したとはいえ、鄭曄の系統と故郷滎陽との関係は復活したと見てよい。後に見るように滎陽の東南にあたる淮西地方、さらに淮南に移住する鄭氏が見られるが、それらは永嘉の乱による移動であった可能性がある。

北魏が都を陥した時、後燕の領域が全て北魏に帰したわけではない。滎陽の地はいったんは後秦領に入るが、のち劉裕が北伐して後秦を滅ぼしたことによって東晋、そして東晋に代わった宋の有となる。

北魏が黄河の南に進出したのは天興二年(三九九)で、滑台を占領して拠点としているが、その後領域を拡大した形跡はなく、泰常元年(四一六)には滑台を失っている。泰常七年(四二二)になって二方面から黄河以南への進出を図り、

宋の兗州や東陽方面では成果を挙げなかったが、洛陽およびその東方の地においては、まず滑台を占領、翌年には洛陽をも取り、続いてさらに南方の陳留や許昌を占領した。けれどもその支配は永続せず、神鼎元年（四二八）には宋による陳留・虎牢攻撃を受け、同三年には宋の河南回復行動によつて全軍が河北に一時撤退するに至っている。北魏は同年中に態勢を立て直して黄河を渡り、洛陽、虎牢、次いで翌四年には滑台を再占領した。これによつて、北魏の黄河以南の地（黄河以南の洛陽、滑台、潁川一帯。青齊地方・淮西地方はこの段階ではまだ宋の領域内にある）の領有はほぼ確定したと見てよい。

神鼎三年の宋軍との攻防の段階で北魏軍の一翼を担った司馬楚之が潁川にいたことが確認できる（『魏書』世祖紀上）ので、滎陽も泰常七年前後に北魏領に入ったと見てよいであろう。『魏書』卷三八王慧竜伝によると、この神鼎三年末、再占領に成功した段階で王慧竜が滎陽太守に任命され、その後になお継続した宋の到彦之らの攻撃をよく防いだとされている。この経過を見れば、滎陽が北魏領として確定するのは、やはり神鼎四年段階に至ってからであると考えられる。

神鼎四年は、北魏で漢人名族の徴召が行われた年である。周知のように、この時の徴召は華北に残留していた漢人名族を網羅していた。「下碑」によると、鄭羲の高祖の鄭略は後趙で給事黄門侍郎に徴せられ、侍中・尚書に遷り、曾祖の鄭豁は後燕の中山尹、太常卿、祖父の温は燕の太子詹事とあり、このように鄭氏は五胡時代に高官を輩出した。その鄭氏が、徴召の対象から除外されているのは、郷里の滎陽が北魏領に入つて間がないという事情が背景にあると見られる。

王慧竜伝に「真君元年（四四〇）使持節・寧南將軍・虎牢鎮都副將を拜し、未だ鎮に至らずして卒す。没に臨み、功曹鄭曄に謂いて曰く、（中略）時の制は、南人の入国する者は皆桑乾に葬る。曄等遺意を申べ、詔して之を許す」とある。既に見たように神鼎三年末に王慧竜は滎陽太守となった。伝に「滎陽太守を拜し、仍お（安南大將軍）長史を領す。在任十年、農戦並びに修まり、大いに声績を著す」とあるように、真君元年に虎牢鎮に移動するまでまさしく一〇年その任にあったことになる。彼の功曹であつた鄭曄は、鄭羲の父である鄭曄と同一人物であつた可能性が高い。つまり、北魏領

に入った段階で、中央に徵召されることはなかったが、鄭氏は地方の有力者として、滎陽の地に赴任した地方長官の属官として重んぜられたのである。⁽¹⁰⁾

鄭曄の末子である鄭義は中書博士から官歴を始めた。⁽¹¹⁾ さらに臨時的に府官についたあと、中書侍郎に就任している。神嘉四年の徵召に応じた三四人の名が『魏書』卷四八高允伝の「徵士頌」に見えるが、彼らの中で本伝、付伝などで経歴が判明する者は一七人、その中で一〇人が中書博士をまず拝している。一〇人の中書博士のうち中書侍郎に遷った者が六人、それとは別に中書博士を経歴したことの記載がないものの、中書侍郎に就任した者が三人いる。つまり中書博士、中書侍郎に就任するケースが多いことを指摘できるのであるが、この神嘉四年の被徵召者の多くと同じ経歴を鄭義はたどったわけである。かつ、鄭義の次兄の鄭小白も中書博士となっている。鄭小白と鄭義の中書博士就任が同時期であった可能性がなくなはないが、兄小白の方が先んじたと考えるのが妥当であろう。中央官界と鄭氏は鄭義以前も無関係であったわけではないのである。さらに述べれば、小白以外の義の四人の兄には就官の記載はないが、郡功曹であった鄭曄が「不仕」と鄭義伝に記されたこと、また、鄭叔夜について、その孫の鄭道忠の墓誌に「祖は清静もて治を爲し、化は枌榆に洽し」とあることを引いて、「枌榆」は本州の職であり、州郡の職は顕要でないから正史はこれに言及しなかったであろう、とした陸増祥の判断（『八瓊室金石補正』卷一五）があることを考えれば、鄭叔夜のみならず他の兄弟についても州郡の職についた可能性があるとよいのではないだろうか。⁽¹²⁾

鄭義が中書博士に叙せられたのは和平年間（四六〇～六五）のことである。列伝には「弱冠」と記すが、太和一六年（四九二）に没した時の年齢が「下碑」によれば六七歳であるから、中書博士になった時は最も若くても三四歳にはなっているはずである。出身の時期としてはやや遅いという感がある。⁽¹³⁾ だが、鄭義の婚姻関係を見てみよう。鄭義の妻は趙郡の李孝伯の女である。李孝伯は太武帝期に尚書、長安鎮都大将に至った李順の従父弟で、本人も比部尚書、さらには秦州刺史に就任した。当時としては清河の崔氏とならび漢人として最高の位置にあった一族である。孝伯は太安五年（四五九）

に死去したが、その段階で鄭羲は中書博士に就く前の三三歳。結婚はそれ以前であったとしてよいであろう。⁽¹⁴⁾既に中央政界で確たる地位を占めていた趙郡李氏との婚姻は、鄭氏が地方に埋没したまままでいたわけではないことを示すであろう。なお、鄭氏と趙郡李氏との間にはその後も婚姻関係が見られるが、現在知りうる範囲では鄭羲の曾孫の世代となっていて、世代の間隔が空いている。⁽¹⁵⁾

他方で、鄭氏は隴西李氏との婚姻関係が密となる。最初の婚姻が行われた時点について検討してみよう。西涼が滅んだ後、太平真君五年（四四四）に李宝が北魏に入朝し、外・内都大官、并州刺史、懷荒鎮將を歴任し、太安五年に五三歳で没した。その長子李承は、列伝によれば文成帝の末年に滎陽太守となり、延興五年（四七五）に四五歳で没している。父のための三年の喪に服したはずだから、滎陽太守となったのは、早くても和平三年（四六二）であろう。李冲は『魏書』卷五三の伝に「少くして孤、長兄滎陽太守承の携訓する所と為る。（中略）兄に随いて官に至る」とあり、滎陽に至ったのが和平三年のこととして、その時には一三歳であった。

この時点では、李冲の義父となる鄭徳玄はまだ宋の領域にとどまっている。伝に
羲の従父兄徳玄、顯祖の初め、淮南より内附し、滎陽太守を拜す。

とある。顯祖の初年の淮南からの内附とは、天安元年（四六六）に起こった宋の晋安王劉子勛の内乱の結果、宋の北辺の諸州が北魏に帰した事件に連動する動きであると見てまちがいない。諸州はその後宋に復帰したため北魏が武力でもってそれら諸州を奪還することになり、淮水をはさんだ国境が新たに確定するのは皇興三年（四六九）のことになる。淮南から内附した徳玄の場合、天安元年から皇興三年までのいつの時点であるか判然としないが、滎陽の南の上蔡（懸瓠）に拠っていた宋の予州刺史常珍奇の内附と同時であった可能性が高いと考える。とすれば天安元年のことである。この時点で李冲の年齢は一七歳である。

李冲の結婚は天安元年から延興五年までの間に行われたと見てよい。さらにしぼると、献文帝の末に李冲は中書学生に

なつて滎陽を離れ、孝文帝の初期に秘書中散となつてゐるので、その前に結婚した可能性が高い。中書学生になつた時が献文帝の讓位の前年の皇興四年だとして、その年には彼は二一歳であつた。⁽¹⁶⁾

以上のように見てきた時、問題はふたつある。まずひとつは、なぜ李冲と鄭徳玄との間に婚姻が結ばれたかということである。隴西李氏と鄭氏との間に關係が生じたのは李承が太守として滎陽に赴任してからであることに恐らくまちがいはない。だが、その段階では徳玄は南朝に居り、滎陽において徳玄と接するのは、早くても天安元年以降であるから、婚姻が行われるまでには、三年の期間しかない。三年の期間は婚姻締結には十分であるにせよ、移住してきて、住地、政界での位置がまだ確定しない状態であるとすれば、三年の期間は決して長くはない。当時、漢人名族間において身分的内婚制が行われていたのであるから、⁽¹⁷⁾婚姻相手の選択は重要な問題であつた。実際に婚姻を取り決めたのは、李冲の親代わりであつた兄の李承であらう。彼は滎陽の太守として鄭氏については十分に觀察できていたはずであり、鄭徳玄を弟の妻家として選ぶにはそれなりの理由があつたはずである。

ふたつめの問題は、鄭羲が李冲と婚姻關係にあることが繰り返して正史で述べられていることである。鄭羲は中書侍郎の職をつとめた後、中山王王叡の傅となつたのであるが、「是の後歴年転ぜず、資産亦た乏し。因りて飯を請いて歸り、遂に盤桓して返らず。李冲貴寵せらるるに及び、羲と姻好なれば、乃ち家に就きて徴して中書令と為す」とあるような経緯をたどる。またのちに西兗州刺史となつた時のこととして、「羲は受納する所多く、政は賄を以て成る。性又た吝嗇、民の礼餉する者あるに、皆な杯酒饜肉を与えず、西門に羊酒を受け、東門に之を酤売す。李冲の親なるを以て、法官は之れを糾せざるなり」とある。ここでは紙幅の關係でいちいち挙げないが、鄭羲およびその子孫と鄭徳玄及びその子孫の就いた官職にも差があつて、鄭羲の系統の就いた官職の方が地位の高い傾向がある。それは何故なのか。

節を改めよう。

鄭氏による郷里滎陽と関わる行動は少なからずあり、先行研究もこの点に着目しているが、鄭氏の行動が持つ意味を考えるためには、北魏の黄河以南の洛陽・陳留・潁川・滎陽一帯の地域に関わる主要な政治的動きをすべて取りあげて、それと鄭氏の関わりの有無を検討する必要がある。以下にそれを記す。

(a) 明元帝の泰常年間の「河南」における地の領有

これについては前述した。滎陽はそれまで東晋南朝の領域下にあったが、この時から北魏領に入った。鄭氏も一部南朝領内にとどまる者はあるもの⁽¹⁸⁾、多くは北魏領内に入ることとなる。この時の鄭氏の行動は記録に残されていない。

(b) 神䴥三、四年の宋による「河南」奪回行動（その前哨戦としての神䴥元年の滎陽方面攻撃を含む）

これについても前述した。神䴥元年に宋将王玄謨らの滎陽侵寇があり、南蛮校尉王慧竜が戦って滎陽太守に任ぜられている。この段階で鄭曄が王慧竜の功曹となっているかどうかは確認できず、また鄭氏の活動も明確には確認できない⁽¹⁹⁾。

(c) 太武帝の太平真君一二年（四五〇）の宋軍北伐と北魏の反撃

鄭徳玄が北伐した宋軍に呼応して、挙兵している。

(d) 献文帝時の淮北領有

これについては一部前述した。鄭徳玄が再入国しているが、このほかにも鄭氏の行動がある。常珍奇の迎接に向かった殿中尚書元石の軍の参軍事として鄭義が上蔡に至り、城内に北魏軍を迎え入れたものなお不穩の動きのあった

珍奇の衆に対し、「明日、羲白虎幡を齎して郭邑を慰し、衆心乃ち定まる」とある重要な働きを行った。なお、同時期、滎陽の東方では宋の徐州刺史薛安都が内属したが、琅邪太守であった滎陽の鄭演が内附に賛成し、ともに入国している（『魏書』卷五五劉芳伝²⁰）。

(e) 孝文帝初の洛州における賈伯奴らの反乱

延興五年（四七五）九月に洛州の人賈伯奴と予州の人田智度がそれぞれ弘農王、上洛王を自称して洛州を攻めたが、州郡によって鎮圧されたと高祖本紀上にある。鎮圧にあつたのは洛州刺史丘頽と北予州刺史尉撥であつたが（『魏書』卷三〇尉撥伝）、中書侍郎として平城にあつた鄭羲も特に派遣されて赴き説得行爲を行っている。なお、北予州は虎牢を治所としており、滎陽はこの時期北予州に属している（『魏書』地形志中）。

(f) 宣武帝初の魯陽蛮の乱

景明二年（五〇一）に潁川の西南の魯陽の蛮が乱を起こし、『魏書』卷一〇一蛮伝によると潁川に迫つたという。左衛將軍李崇が派遣されて討伐にあつた。鄭氏の関与は記録されていない。

(g) 孝明帝時の魯陽蛮の乱

孝昌元年（五二五）に魯陽蛮が再び乱を起こし、臨淮王元彧が討伐にあつた。鄭氏の関与は記録されていない。

(h) 孝明帝時の劉獲らの反

孝昌三年（五二七）年に梁將の湛僧珍が東予州を攻略したが、それに呼応して予州陳郡の民の劉獲と、恐らく滎陽鄭氏である鄭弁が西華県で挙兵した。源子恭が曹正表に代わって予州刺史となり、曹正表が東南道行台となつて鎮圧した。

(i) 孝明帝末年の李洪の反

武泰元年（五二八）二月に鞏県以西、伊闕以東で、群盗とされる李洪の乱が起こり、李神軌らの中央軍が派遣され

て鎮圧した。鄭氏の関与は記録されていない。

(j) 孝荘帝時の爾朱榮の入洛

武泰元年三月に鄭儼・徐紇を除く名目で挙兵した爾朱榮は、四月に孝荘帝を擁立し、洛陽に入って河陰の変を起す。鄭義の兄鄭洞林の孫である鄭儼はそれに先んじて従兄の鄭仲明を滎陽太守に任命させていて、いざという場合に滎陽に拠って挙兵することをもくろんでいたが、成功せず、部下に殺される。

(k) 孝荘帝時の元顥入洛

永安元年(五二八)に、梁が自国に亡命していた北海王元顥を北魏に送り込む。北海王は翌二年五月に滎陽を陥し、洛陽に入る。しかしもろくも七月にはその政権は瓦解し、北海王は敗走途中で殺される。この時、広州刺史(治所は魯陽)であった鄭先護は反北海王の挙兵を行った。鄭先護は鄭義の兄鄭連山の孫である。のち爾朱榮誅殺後の爾朱氏反撃に対抗しようとして失敗、梁に亡命している。

(l) 孝武帝の「入関」

永熙三年(五三四)五月に孝武帝は河南諸將の兵を徵発、斛斯椿らが虎牢に、賈躡智が滑台に鎮して高歡に備え、弘農にまで迎えに出た宇文泰を頼って洛陽を脱出、長安に入った。孝武帝の「入関」に従った鄭氏には、鄭洞林の曾孫鄭道紇(字は孝穆)、鄭文寛(鄭儼の子)がいるが、鄭氏の多くは高歡に擁立された孝靜帝の政権(東魏)に残留している。

(m) 東西魏の攻防(五三七年まで)⁽²¹⁾

孝武帝が長安に入ってから暫くの間、東西両政権の間で激しい戦闘が繰り返りひろげられる。その主舞台は華陰から洛陽の東方までの、黄河沿い、およびその南方の地域であった。

五三四年から五三七年の前半までは東魏が西魏に攻勢をかけ、潼関を中心に、蒲津、上洛といった関中への入り口

にあたる地域で戦闘が繰り返される。⁽²²⁾五三七年八月に西魏が東伐して弘農を占領したが、同年一〇月には東魏が反撃して関中に攻め入っている。しかし東魏は沙苑で大敗、逆に西魏が洛陽に入り、許昌、潁川を領する潁州が西魏に入り、滎陽も西魏領となる。西魏はさらに汝南方面への進出を狙い、この情勢を見て、東方の河間や范陽でも西魏に呼応する勢力が立ち上がる。『周書』文帝紀下大統三年八月条には、この情勢を「是れより先、河南の豪傑多く兵を聚めて東魏に応ず。是に至り、各々所部を率いて来降す」と表現する。この大統三年に発生した事態に鄭氏も深く関わっている。鄭偉や鄭榮業が挙兵し、梁州刺史を捉えて西魏に付しているものであり、鄭偉の族人の陽城・陳留二郡太守の鄭頂も、子の鄭常とともに挙兵に参加していた（『周書』卷三六⁽²⁴⁾）。

(n) 東西魏の攻防（五三八年以後五四三年まで）

五三八年になると、東魏が反撃する。西魏は潁川、汝南から撤退し、南汾州、広州も手放し、七月には洛陽をも失い（河陰の戦い）、前年に立ち上がった河間や范陽の兵も潰え、西魏の東方への前線は弘農となる。その後年末に西魏が反撃に出て、崤・澗までを奪回、その北では汾州が東西の国境となる。この後情勢はしばらく落ち着く。この時期には鄭氏の動きは伝えられていない。

(o) 東西魏の攻防（五四三年～五四七年）

五四三年に、東魏の高慎が虎牢を治所とする北予州をもって西魏に降り、西魏は洛陽に至る。その結果邙山の戦いが起こるが、西魏は利あらず、弘農の守備を固め、北予、洛州は東魏領にもどる。この時、舅の高慎に従い滎陽開封の人鄭術が西魏に入っている。⁽²⁵⁾

(p) 東西魏間、および北周・北齊間の攻防（五四七年以後）

五四七年に東魏の高歡が死ぬと、侯景が背き、情勢は再び流動化する。東魏は侯景を潁川に攻め、西魏は侯景を救援して潁川に入城するのであるが、一方、梁も彭城に向けて大挙北伐し、別に羊鴟仁が懸瓠に入る。しかし羊鴟仁は

東魏に迫られて義陽に撤退。東魏の水攻めを受けて五四九年に潁川も陥落。五五〇年には宇文泰が東征しようとしたが蒲坂に至って引き返す。この結果、河南は洛陽より東、河北は平陽より東は皆東魏の有するところとなり、この方面の勢力図は基本的にはこれ以後変わらない。⁽²⁶⁾五五八年に北齊の北予州刺史司馬消難が北周に付したが、周軍は消難本人の迎接には成功したものの、勢力範囲には変化は見られないのである。

五六三年頃より北周の北齊攻撃の動きが活発化する。この場合、汾水流域沿い、あるいはそれより北からの攻撃ルートが主となり、長安から東進して洛陽をめざす攻撃ルートは副次的となる。その中で五六四年に西魏の尉遲迥が洛陽、権景宣が懸瓠を攻めたが、成功に至らず撤退している。そして五七六年に始まった北齊攻撃は、晋州、并州、鄴というルートで進行し、北齊の滅亡に至った。

五四七年以後のこの期間における鄭氏の活動は記録されていない。

以上、一六回に分けてみた政治的行動のうち九回について鄭氏が何らかの形で関与している。m、pの四回は含まれる期間が長く、a、lの二回と同一に扱うのは問題だという批判は当然あるであろうが、鄭氏の関与する事例が多いということには誰しも異論がないであろう。ケースに分けて検討してみよう。

まず、e、f、g、iの四件は、対立する王朝間の争いや、中央における政治的斗争とは直接の関係はないように見える。つまり局地的な事件であった。eは、首都が平城にあった時期の事件で、刺史の率いる地方軍が鎮圧し、中央軍の行動は最終的にも見られなかったものの、「義は河南の民望、州郡の信ずる所と為るを以て、義を遣わして伝に乗りて慰諭せしむ。義到り、禍福を宣示し、重く募賞を加うるに、旬日の間、衆皆な帰散す」とあるように、鄭義が駅伝を利用して中央から急行し、説得にあたった。それは鄭氏が「民望」として河南に影響力を持つことが認められていて、それを利用することを中央政府が考えたからである。他方、f、g、iは鄭氏の関与が見られない。その理由としては、f、gが魯

陽という、潁川から約一〇〇km西方に離れた地域であることよりも、蛮族の反叛行動であることがまず考えられる。また洛陽に遷都して中央軍が比較的短時日のうちに対処できることも理由に挙げえよう。iの場合は、まさしく後者の理由による事例であろう。河南方面での反乱への対処という点では、遷都後鄭氏の関与の必要度が弱まったのである。

次にa、b、c、d、hは、南朝と北魏の対立抗争の場において起こった事件である。滎陽一帯が北魏領に入ったaの段階では、鄭氏が主体的に北魏による占領に協力したという記録は現在のところみられない。鄭羲の中書博士任官時の年齢がやや高いことを見ても、北魏側が占領に先立ち鄭氏に働きかけを行っていたとは考えられない。aは北魏による河南における橋頭堡の確保のための軍事行動という側面が強いのである。

しかし、いったん占領下においた河南地域の確保に際しては、五胡時代に高官を輩出した鄭氏の影響力を利用することが北魏にとって望ましいと考えられるようになったようである。南朝からの帰降者としてよい王慧竜が滎陽太守となったのは、南辺統治に関わる北魏政府の方針に沿った措置であった⁽²⁷⁾であろうが、この人事は鄭氏を北魏に落ち着かせるのに役立ったであろうし、王慧竜の属僚に鄭氏が用いられて行く。

北魏の鄭氏に対する期待は、dに最もよく示されている。鄭羲が汝南の人々に白虎幡を掲げて説得活動を行い、それが効果を挙げた理由は何であったのだろうか。

晋安王劉子勛が明帝に反旗を翻したのは宋の泰始元年（四六五）末であったが、それに呼応したひとりに汝南の人常珍奇がいた。これに対して、『宋書』卷八七殷琰伝に

淮西の人、前の奉朝請鄭黒⁽²⁸⁾、子弟・部曲及び淮右の郡を率い、陳郡城に起義す。衆一万有り。太宗以て司州刺史と為す。後ち虜淮西に寇し、戦い敗れて殺さる。

とあり、明帝側に立って淮西の鄭黒が、また少し遅れて同伝に

淮西の人鄭叔拳、起義して常珍奇を撃つ。以て北予州刺史と為す。

と、同じ立場で同じ淮西人鄭叔拳が挙兵している。淮西とは、『資治通鑑』卷一三一泰始二年一二月条胡三省注に「淮西七郡とは、汝南・新蔡・汝陽・汝陰・陳郡・南頓・潁川なり」とあって、淮水以北の地である。これに対して常珍奇は北魏に降伏を申し入れ、北魏はこの方面に殿中尚書元石を派遣、鄭羲がその参軍事として従った。常珍奇が拠っていたのは上蔡（懸瓠城）であり、鄭羲が収攬しようとしたのは直接的には上蔡の人々、つまり常珍奇に従っていた人々であったのであるが、反常珍奇の立場で挙兵していた人々、特に鄭氏に対しての影響力行使をも期待していたと考えることができるように思われる。鄭黒がどの時点で戦死したのかは不明であるが、鄭黒及び鄭叔拳は滎陽鄭氏の一員であったと考えられるからである。⁽²⁹⁾

一方、晋安王劉子勛の乱に加担した宋の予州刺史殷琰は寿陽に鎮していた。これに対し『宋書』卷七九竟陵王劉誕伝に、

太宗初めて即位し、鄭瑗は山陽王休祐の驃騎中兵参軍と為る。予州刺史殷琰、晋安王子勛と同逆するや、休祐は瑗及び左右邢童符を遣わして琰に説かしむ。琰受けず。鄭氏は寿陽の強族なり。（中略）寿陽城の降るに及び、琰は輩に随いて同に出づ。

とあるように、鄭瑗が説得のために寿陽に派遣されている。その理由はわざわざ挿入されている「寿陽の強族」であることによるのであろう。寿陽の人々に対する影響力の大きさを背景に説得工作を行ったわけである。この鄭瑗は滎陽鄭氏であらうと安田二郎氏はいう。⁽³⁰⁾『梁書』卷一一鄭紹叔伝に「滎陽開封人也、世居寿陽」とあるからである。

また、これに先立つ宋の元嘉二七年（四五〇）二月の『宋書』文帝紀に、

索虜の汝南諸郡に寇するに、陳・南頓二郡太守鄭琨、汝陽・潁川二郡太守郭道隱⁽³¹⁾、守を委ねて走る。

という記事がある。鄭琨は『梁書』鄭紹叔伝に紹叔の祖父として見えていて、寿陽に居住する滎陽鄭氏である。⁽³²⁾

さらに、淮水以北が北魏領となつて約六〇年後のhの陳郡の人とされる鄭弁の場合を見ると、彼の挙兵した西華県は陳

郡城からは西北に六〇kmほど離れているが、陳郡は淮西にあり、彼は東南方に発展していった滎陽鄭氏の一員であったであろう。しかも彼は曹正表の部下が「湛僧珍の敢えて深く入りて寇を為す所以の者は、(劉)獲・(鄭)弁の皆な州民の望たりて之れが為に内応するを以てなり」と発言しているように「州民の望」であったのであり、形勢が傾くとそのもとに逃げ込むことができたほど、北魏の有力な官員であった源子恭と親旧の間柄であった(『魏書』卷七二曹正表伝)。

このように見てくると、滎陽鄭氏の一部は、郷里滎陽開封を離れて東南の方向、すなわち淮西の地方、確実な居住地としては陳郡、さらには淮水を越えた寿陽にまでも移住して行き、それらの地域にも巨大な影響力をもつ強族になっていたことがわかる。滎陽から陳郡を経、寿陽に至るルートは潁水などの河川を利用しうる交通の幹線であった。⁽³³⁾鄭氏はそのルート沿いに拠点をつくって拡大していったと考えられる。鄭黒は奉朝請と地位は低いものの宋の官僚となった経歴があり、鄭瑗も驃騎中兵參軍の地位を保っている。鄭叔拳は挙兵当時無官であったが、挙兵に対する権宜の措置であったにせよ、刺史の地位を獲得していて、刺史の官を一時的にせよ与えられるにふさわしい背景を持っていたことを想定できる。より注目すべきであるのは鄭琨である。彼が太守として就任していた陳、南頓郡は淮西七郡に属するからである。彼の居住地は寿陽であったにせよ、同じ滎陽鄭氏が居住し、挙兵して一万の人々を糾合しうるほどの影響力を持っていた地域に太守として赴任していたのであり、本籍地長官任の事例に準じると考えてよい。⁽³⁴⁾

以上のように検討した結果、滎陽鄭氏が居住し、強い影響力を持っていた淮西の地に赴く派遣軍に中書博士であった鄭羲が参軍事として起用された意味は明らかになったと考える。中央政府がこの地における滎陽鄭氏の影響力を理解し、それを利用することを考慮しての任命であったと考えて誤りあるまい。一方、滎陽から淮西、寿陽にかけて居住する鄭氏に對しては、北魏側からの働きかけのみが行われたわけではなかった。c、hは南朝側からの働きかけに北魏領内の鄭氏が応じた事例である。

南朝との国境線が淮水に移り、淮水以南が南北の争いの場となる状況が固定すると、鄭氏の南北朝の狭間にあつての動

きは目立たなくなる。

次に北魏末期の政治的抗争に鄭氏が関わった事例がある。jの場合、鄭氏の万一の場合の抵抗拠点として滎陽が設定されている。『魏書』地形志中によれば、それまで滎陽郡に属していた開封県が、孝昌年間から陳留郡に属するようになっていて、jの時点では滎陽は鄭氏の本郡ではなくなっているが、地域区分の変更があった直後の行動であり、鄭氏の培った影響力が滎陽においてなお強いという状況がなければ、鄭儼はこのような企てはしなかったであろう。鄭儼にとっては、情勢を見計らった部下に裏切られて失敗に終わったのは意外であったであろうにせよ。kの鄭先護が拠った広州は永安年間に設けられた州で、治所は魯陽に置かれ、襄城の地をも含む（『魏書』地形志中）。魯陽は上述のように潁川の西約一〇〇kmにあたり、蛮族以外の住民に滎陽鄭氏の影響力が及んでいた可能性もあるが、それよりも東方の滎陽や淮西地方に住む滎陽鄭氏のもつ力との連携を、鄭先護としては期待していたと想定できるのではないか。

残るl、m、n、o、pは、北魏の分裂時と分裂後の時期に関わる事例であるが、東西両政権のちょうど中間に位置する滎陽の地にある鄭氏は、必然的に政治的抗争に巻き込まれる。lの孝武帝が「入関」する際には、洛陽の東方の滑台までを高歡軍に対する防御措置範囲内に含めている。ただし、この防御措置は十分には機能しなかった。洛陽に居を構えていた官僚の多くは孝武帝に従わず、洛陽もすぐに高歡軍の手に帰している。孝武帝に直接従った者たちはいたが、滎陽を拠点とした行動を鄭氏がとった形跡はない。

鄭氏が本拠地に拠って行動するのはmの時期である。『周書』文帝紀大統三年条には、先述の潁州が西魏に帰した記事に続けて、

滎陽の鄭榮業・鄭偉等、梁州を攻め、其の刺史鹿永吉を擒え、清河の人崔彦穆・檀琛、滎陽を攻め、其の郡守蘇定を擒え、皆な来附す。梁・陳より已西、将吏の降る者相い属なる。

と記す。東西魏が分立した段階で地方区画に変更が加えられており、この段階では梁州は大梁城を治所として陳留、開封、

陽夏郡を領していた。一方、滎陽郡は、滎陽郡を分割して成立した広武郡、成皋郡とともに北予州に属している（『魏書』地形志中）。つまり滎陽開封の鄭氏は、この段階では梁州に属しているのである。鄭偉は鄭先護の子であり、父とともに梁に亡命したあと、孝武帝が長安に入ったのを見て、故郷に帰り、しばらく官につこうとしなかったが、西魏が洛陽を回復した段階で親族に語らい、「是に於いて宗人榮業と州里を糾合し、義を陳留に建つ。信宿の間、衆万余人有り」（『周書』卷三六）という動員力を發揮したのである。⁽³⁵⁾

しかし、nに見られるように、五三八年に東西魏の国境が洛陽の西方の弘農の線で落ち着くと、滎陽鄭氏の活動の余地は少なくなる。oは東魏の内紛に起因する高慎の西魏への内附の事例であるが、鄭術墓誌によると、「君の舅高慎、牧して予州為り。君深く逆順を知り、機萌を洞識す。乃ち謀謨を賛翼し、思いを志就に潜む。既にして左提右契、衆を挙げて西帰す」とあって、その際高慎の姉妹の夫鄭術が中心的な働きをしたことがわかる。鄭術の祖父は本州別駕、父は卷県令であったが、術はそれまで就官したという記載は墓誌に見えない。⁽³⁶⁾未就官の彼がどの程度の影響力を鄭氏あるいは郷里に及ぼし得たであろうか。恐らくごく限られた範囲に止まったであろう。北周による北齊併合の戦いの主戦場は、pに見るように黄河を離れた地域であった。滎陽鄭氏の本拠に根ざした活動が見られないのはむしろ当然と言える。

4

以上に見てきたように、「河南」を舞台に繰りひろげられた北魏の政治的動きにおいて、鄭氏は滎陽開封と、移住した淮西、寿陽方面における影響力を行使し、あるいは行使することを期待されて、政権から使命を与えられた。⁽³⁷⁾ここで、第2節で挙げたふたつの問題に一応の解答を出しておきたい。

鄭徳玄は、宋の元嘉二十七年（北魏では太平真君十一年。四五〇）の北伐に際し、『宋書』卷七二南平王劉鑠伝に「鑠は

中兵參軍胡盛之を遣して汝南に出、到坦之をして上蔡に出て、長社に向かわしむ。(中略) 到坦之等進んで大索に向かうに、滎陽の民鄭徳玄・張和、各々起義し、以て坦之に応ず」とあるように、宋軍に呼応して挙兵した。宋の北伐は多方面で同時に遂行されたが、南平王劉鑠麾下の軍が向かったのは淮西から洛陽方面であって、この記事の直後に到坦之らは虎牢で敗北して逃げ戻っている。鄭徳玄が呼応したのはこの方面の軍であったのであり、大索は滎陽県城の西にあったのであるから、⁽³⁸⁾ 徳玄が挙兵した地域は故郷の滎陽かその近辺であったと想定してまちがいない。

宋の北伐は最終的には失敗し、北魏の太武帝は反撃して長江のほとりにまで至っているが、それはともかく、鄭徳玄はもちろん北魏領内にはとどまり得ず、南朝に入っていたはずである。宋の司州刺史魯爽が宋の孝建元年(四五四)に南郡王劉義宣とともに挙兵して敗死しているが、その際の配下の將軍に鄭徳玄の名が見える。魯爽は上述の北伐の際に大索に向かったひとりである。また北魏に仕えながら北伐の前年に宋に付した経歴を持つ。⁽³⁹⁾ 鄭徳玄が北魏に背いて挙兵したあと、魯爽の配下に編入されたという可能性は高い。魯爽の敗死後、その有力な配下の部將が無事でありえたことに問題は残るが、以上に述べた鄭徳玄はいずれも同一人物であったと考えてよいであろう。鄭徳玄は「淮南より内附」したとされている。先に居た鄭氏と同じ寿陽に居住したということであろう。⁽⁴⁰⁾

鄭徳玄はなぜ再入国したのだろうか。彼が入国した時の官職は記載されていない。記載が省略されただけである可能性はあるが、魯爽の配下であったことにより官職を失っていたと考えることもできる。少なくとも彼は南朝での先行きに不安を感じていたと考えて誤りないであろう。他方、短くても一六年を南朝で過ごした者が再度入国することは容易ではなかったはずである。史料が残っていないので、確認はできないが、この間滎陽にある一族との連絡があり、常珍奇の内属に際して北魏復帰の働きかけが行われたとするのが最もありうる筋書である。また、それが滎陽太守であった李承の承認のもとで行われたと想定してもあながち的はずれとは言えないのではないか。

宋の北伐に呼応しての挙兵は鄭徳玄が滎陽鄭氏の中でも影響力のあった人物であることを意味する。また挙兵して付し

たという功績はあるにせよ、宋の刺史のもとで將軍、しかも「偏師馬歩三千」の派遣を命じうる高い地位の將軍であったことを考えると、彼の復歸は北魏にとって大きな意味を持ったと考え得る。復歸働きかけは試みるに価した行動であろう。鄭徳玄は再入国後、いつの時点か不明であるが（早くとも李承の死去する延興五年以後である）滎陽太守となった。その功績が評価されての人事であるが、他方、滎陽の統治を委ねてもよいという中央政府の判断がなければできない人事でもある。

従って、鄭徳玄の復歸は故郷の鄭氏一族に抵抗なく迎えられたと考えられる。もし想定したように李承が復歸に關与していればなおさら、關与していなくても影響力の大きい鄭徳玄の系列と結びつくことは、李氏にとって利益となる。

隴西李氏が北魏に入国した際には、確かに李宝はもと西涼国主の血筋として厚遇を得たが、その子たちの地位はさほど高くはならなかった。長子李承でさえも、比較的若くして死去したとはいえ、滎陽太守で終わっている。その状況下で、滎陽鄭氏の郷里における影響力を見たとき、李承が鄭氏と提携して将来を切り開く手段とすることを考えたとしても不思議ではない。李承が伴っていた末弟李冲と、再入国して故郷にもどったばかりではあるが鄭氏の中でも有力である鄭徳玄の女との婚姻はこうして成立したのであろう。

次に鄭羲と李冲の關係について検討してみよう。『魏書』は鄭徳玄を鄭羲の従父兄としている。一方、『新唐書』宰相世系表は、鄭曄の父鄭温には四子があり、曄が北祖、簡が南祖、恬が中祖とされている。⁽⁴²⁾『魏書』では鄭簡を鄭羲の叔父としていて、宰相世系表と一致するが、鄭恬については記載がない。恐らく鄭徳玄は鄭恬の子であろう。

曄、簡、恬の三兄弟は滎陽開封の地に居住して北魏期を迎えた。鄭曄が郡の功曹であったことからすれば、簡、恬も郡の属官クラスで終わった可能性が高いが、しかし、滎陽の帰属がめまぐるしく動く政治的に不安定な時期にあたっており、必然的に一族の安寧を保持するための兄弟の結束の固さが求められたはずである。

鄭曄兄弟の子らの世代にもその結束の固さは継承されたのではないか。その故に、いったん故郷を離れた鄭徳玄も故郷

に再び落ち着き得たのであり、しかも故郷滎陽の太守から姻戚となることを求められている。李承としてみれば、鄭一族の結束の固さがなければ取って南朝に身をおいた徳玄に婚姻を求めする必要はなかったと言える。徳玄と姻戚となることで滎陽鄭氏、特に鄭曄、鄭簡の子孫との関係が深まると考えたのであろう。

当時の滎陽鄭氏の中では、鄭曄の子孫が中央政界との結びつきを強めつつあり、特に鄭羲が趙郡李氏と婚姻関係を確立し、政治的に有望であった。兄李承の意図を受け継いだ李沖は滎陽鄭氏の牽引役を鄭羲とその系統の人々に期待したのである。李沖の娘は六名いた。三女が范陽の盧氏、四女が彭城王元勰、五女が清河の崔氏、六女が元氏に嫁しているが、長女を鄭羲の長男の鄭道昭、次女を鄭徳玄の孫の鄭洪建と、⁴³まず鄭氏に、しかも鄭羲と鄭徳玄の系統に妻として与えていることに、明確に彼の意図を読みとることができるのである。

景明二年（五〇一）、咸陽王元禧の謀反事件が起こる。その首謀者とされ誅殺された禧の妃の兄李伯尚は李沖の兄李茂の長子であるが、この時鄭徳玄の孫にあたる太尉祭酒鄭洪建、その弟の同じく太尉祭酒鄭祖育、さらに鄭羲の甥太尉中兵参軍鄭思和が禧の叛逆に加わったとして処刑されている。孝文帝の長弟として勢威のあった禧の周囲に鄭氏三名と李沖の甥がいたことは、隴西李氏と滎陽鄭氏の結びつきの強さを示すものである。

5

『魏書』卷七七辛纂伝に、北海王元顥の軍を退けて孝荘帝が洛陽に復帰した直後のこととして

還りて虎牢に鎮し、俄かに中軍將軍・滎陽太守に転ず。民に姜洛生・康乞得なる者有り、旧と是れ太守鄭仲明の左右なり。豪猾偷窃、境内患と為す。纂は捕を伺いて擒獲し、郡市に梟す。百姓忻然たり。

という記事がある。既述のように、爾朱榮が孝荘帝を擁して洛陽に入る前、鄭儼が滎陽太守に任命して万一の場合に備え

たのは鄭仲明であった。鄭仲明は滎陽の「豪猾」を左右、つまり主要な郡吏として採用していたのである。郡太守の統治は一般にこのような措置で確保されるのであるが、鄭徳玄の系統は三代（徳玄、穎考、仲明）、このほかに鄭簡の子の鄭靈虬も滎陽太守となっている⁽⁴⁴⁾。仲明の就任直前に開封県は滎陽郡から切り離されたが、滎陽郡における鄭氏と「豪猾」の関係は絶たれていなかったと考えるよいのである。さらに滎陽郡内の県の県令を鄭氏が占める事例もある。『魏書』卷八 八良吏・宋世景伝に

尋いで伏波將軍を加えられ、行滎陽太守たり。鄭氏豪横、号して難治と為す。濟州刺史鄭尚の弟遠慶、先に苑陵令為りて、受納する所多く、百姓之れを思ふ。世景下車し、召して之れに謂いて曰く、卿と親たり、宜しく仮借すべし。吾れ未だ至らざるの前は一に相い問わず。今日の後には終に相い捨かず、と。而るに遠慶は意を行うこと自若たり。世景之れを繩するに法を以てし、遠景懼れ、官を棄てて亡げ走る。是に於いて僚屬威を畏れ、改肅せざる莫し。（中略）弟道璵の事に坐して除名せらる。

とある。宋道璵は『魏書』卷七七によると、永平元年（五〇八）の京兆王元愉の反乱の際に死んでいる。この時点では開封はなお滎陽郡に属しており、苑陵県は開封の西南五〇kmほどにある。

鄭氏が本郡の太守を占めた事例の多さ、郡の属僚を占めたことについては既に述べた。これに郡内の県の統治を押しさへ、また郡内の他姓の「豪猾」と結ぶ。さらに洛陽が近くであるということにもよるのであろうが、官吏としての経歴の合間に故郷に戻る事例も見られる⁽⁴⁵⁾。鄭氏以外の太守にとって「難治」とされるほどの鄭氏の影響力は、このようにして維持されたのであろう。

そのようにして培われた鄭氏の隠然たる力は、鄭氏の特定の系統にのみ帰するものではなかったのではないか。その点については前節でふれたが、あと一例を追加しておこう。爾朱榮入洛に際して滎陽で抵抗しようとした鄭氏のうち、鄭儼は鄭洞林の孫であり、鄭仲明は鄭徳玄の孫であつて、正史には従兄とある⁽⁴⁶⁾が、高祖父が同じであるに過ぎず、血縁関係は

かなり薄い。さらに鄭羲の孫にあたる鄭敬祖も、この時に故郷にいたようで、「郷人」に殺されている。鄭氏の影響力に期待した鄭儼のもくろみは、恐らくは形勢を見た鄭氏の大多数の支持するところとはならず、失敗に帰し、鄭氏は少なからぬ打撃を受ける。それは或いは鄭氏の東西魏政権への分属という現象につながった可能性がある。しかし、それは鄭氏の力の弱さを示すものではなかったのである。

そのような郷里における鄭氏の力は、同族がその東南の淮西一帯に広がっていることにより、いつそう強いものと中央政府には意識されたであろう。鄭氏が東西魏分裂時期においても重要な働きを示したのは、そのひとつの現れである。

6

以上、滎陽を中心とする鄭氏の拠って立つ力の源を不十分ながら考察した。最後に北魏末の鄭氏について、その力が衰えたとする見解が近年示されているので、それについて言及して、末尾の言葉に替えたい。

一九八〇年代に開封市朱仙鎮で発見された鄭胡墓誌（磚誌）は、延昌四年（五一五）に死去した鄭胡が他の三祖（その他に一族一七人）とともに太昌元年（五三二）改葬されたことを記す表裏あわせて八五字の簡単な記載内容であるが、これについて、郭世軍・劉心健氏は、鄭先護らが孝莊帝とともに爾朱榮を誅殺したことに對する報復で多数の鄭氏が殺されたが、その人々が爾朱氏が滅びたあとに葬むられたものと考えた（「開封發現北魏鄭胡墓誌磚」〈『文物』一九九八—一〇一〇〉）。これに對し、羅新・葉煒氏は、太昌以前に鄭胡ら四祖は死亡して葬られていたのであるが、鄭儼の挙兵失敗に際し、「豪横」であって、郷里の人々に「之れを疾むこと仇の若し」と恨まれていた鄭氏は、鄭敬祖のように殺され、祖先の墓も暴かれたのであって、死亡した者の埋葬と暴かれた者の改葬とが太昌元年に行われたのであるとする。羅氏らはまた、この段階で滎陽開封における鄭氏の力は衰えたのであって、鄭氏が孝武帝の入関に從う原因のひとつになり、故郷における鄭

氏の力の復活は北周が北齊を滅ぼすのをまたねばならなかったという。⁽⁴⁷⁾これは非常に鋭い分析であるが、筆者は以下のよう⁽⁴⁷⁾に考える。

鄭羲の兄弟の名が『魏書』では二字となっているが、これは字^{あざな}であり、一字の諱を持っていたという点は同意できる。鄭小白が宰相世系表により名が茂であることが確認できるからである。従って墓誌の「一祖鄭麟」が鄭白麟であること、墓誌の「鄭胡」が鄭羲兄弟の誰かであることには同意できる。

墓誌に記された「四祖」に鄭徳玄が含まれないことは確実である。なぜならば、孝莊帝の母は彭城王元勰の妃、つまり李沖の第四女である。また李沖の次女は鄭徳玄の孫の鄭洪建に嫁していた。その故に洪建の弟鄭季明は孝莊帝擁立に与していたのであるが、季明の兄、洪建の弟である鄭仲明は、爾朱榮とその擁立した孝莊帝に対して挙兵したにもかかわらず、「且つ国に奉ずるの意有り」という理由で、孝莊帝から追贈を受けた。また仲明の子の鄭道門は大梁に鎮する大都督李叔仁を挙兵に誘う使者となつて派遣され、叔仁に斬られたにもかかわらず、その死の年（恐らくは埋葬の年）にやはり贈官を受けている。鄭儼と鄭仲明の挙兵によつて鄭徳玄の系統は死者は出したけれども、政治的な不利益は蒙らなかつたと考えられる。

同じく李沖の長女を妻にした鄭道昭の系統も、たまたま鄭敬祖は故郷にあつて巻き込まれたが、鄭儼等の行動によつて他の者が政治的に不利になつた形跡は見られない。例えば、鄭道昭の甥の鄭仲礼の姉は高歡の妻になっている。鄭氏であることが政治的な不利を示したとは考えられないのである。一方、鄭連山の孫の鄭先護は、kに見るように北海王元顥の入洛に対して孝莊帝側に立つて挙兵している。

このように見ると、滎陽の人々の中に鄭氏の「豪横」の行為に恨みを抱く者がいて、その故に鄭敬祖のように殺される者がいたことは確かであるが、鄭氏の死者を葬れない、暴かれた遺体を改葬できないような状況を孝莊帝が許したとは思えない。

とすれば、爾朱榮誅殺に対する爾朱氏の反撃が鄭胡墓誌の背景にあるという劉世軍氏等の想定が正しいのではないか。鄭先護はこの時爾朱氏に敗れ、子の鄭偉とともに梁に逃れた。孝莊帝と鄭氏との関係の深さは広く知られていたのであり、それに鄭先護の抵抗もあって、鄭氏は爾朱氏による攻撃を受けたのである。

太昌元年三月に爾朱氏の主力は高歡に敗北しており、翌年一月には爾朱兆も滅ぶ。墓誌に記された太昌元年一二月は、爾朱氏復活の可能性がないことが広く認識された時期とみてよい。この段階ではじめて鄭氏は死者を葬ることができたのである。

とすれば墓誌の「四祖」は必ずしも鄭義兄弟でなくてもよいことになる。しかし、鄭胡の子孫が墓誌を作ったのであり、彼らが「祖」と考える残るふたりも、羅新氏等の言われるように鄭義の兄弟である可能性は高いとしてよい。

孝武帝の入関に従ったのは鄭小白の曾孫鄭敬道と鄭敬徳兄弟、鄭洞林の曾孫鄭道邕、その従兄弟で鄭儼の子の鄭文寛である。少し遅れた大統三年に挙兵して西魏に入ったのが鄭連山の曾孫鄭偉。こう見えてくると、鄭義の三人の兄弟の曾孫が西魏に積極的に加わっている。墓誌の「四祖」のひとりが鄭白麟であるから、残る三祖が鄭小白・鄭洞林・鄭連山であり、墓が暴かれる屈辱を許した北魏およびその継承政権に拒否感を持っていたということは十分あり得る想定である。

本稿は北魏における鄭氏の力を考察したのであり、羅氏等の考えられるように北魏末に郷里においてその力が打撃を受けたとしても、それ以前についてのあり方には変更をきたすものではないであろうが、敢えて見解を付してみた。

- (1) 矢野主税「鄭氏研究」(『長崎大学学芸学部社会科学論叢』八、九、一〇、一九五八〜六〇)。
- (2) 谷川道雄「鄭道昭とその一族」(『書論』六、一九七五)。
- (3) 拙稿「北朝における祭陽鄭氏―鄭道昭の背景」(『書と書論』七、一九八六)。
- (4) 陳爽『世家大族与北朝政治』中国社会科学出版社、一九九八。
- (5) 韓樹峰『南北朝時期淮漢迤北的边境豪族』社会科学文献出版社、二〇〇三。
- (6) 鄭道昭の手になる父鄭羲の頌徳碑。山東省にあり、『山左金石志』卷九、『八瓊室金石補正』卷一四に録文が載せられていて、碑額が「祭陽鄭文公之碑」となっている。「鄭羲下碑」と称されることが多い。別にやはり鄭道昭の手になる「鄭羲上碑」もある。よって本稿では「下碑」と略称する。
- (7) 『新唐書』宰相世系表五上は趙の侍中、『元和姓纂』卷九によると前趙の侍中という。
- (8) 『魏書』卷五六鄭羲伝では後燕の太常卿となっている。宰相世系表は太子少傅とするが、贈官の可能性がある。
- (9) 『魏書』官氏志に載せる太和後令に諸開府功曹史が見える。『魏書』卷二四崔玄伯伝には前秦に征東將軍府功曹が存在したことが記されている。嚴耕望氏は以上により州

の軍府に功曹がいたとしておられる(『中国地方行政制度史』上編四、五七二頁)。つまり鄭曄は寧南將軍府の功曹であった可能性があるが、この場合は郡太守の属官としての功曹であろう。

(10) 鄭羲伝によれば、曄は「不仕」だったという。しかし『新唐書』宰相世系表五上によると、曄は北魏の建威將軍・南陽公であったと記す(『文苑英華』卷九五「舒州刺史鄭公(甫)墓誌銘」もそうになっている)。一方「下碑」には、曄は建威將軍・汝陰太守とある。この時期の北魏では爵位と將軍号のみをもって活躍する事例が多いが、建威將軍は太和前令で四品中、ほぼ中位の將軍号で、公爵との差が大きい。一方の汝陰はこの時期には宋の領域にあることが鄭羲伝で確認できる。谷川道雄氏は、南朝宋の内乱に乗じて北魏が山東から河南にかけての地を占領した際、鄭曄もそれに協力しその功績によって名目的な官号を得たのではないかとされる(谷川氏注(2)所掲論文)。「下碑」の「仁は義徒に結ばれ、績は寧辺に著し」という鄭曄に関する記述は、確かに献文帝期における功績の可能性を持つが、神麴年間の可能性を排除するものではない。筆者としては贈官の可能性が一番大きいのではないかと考える。陳爽氏も贈官とされる(注四所掲論文)。北魏の贈官は、「將軍号+地方長官号+(爵位)」が基本形で、曄の場合、それに合致するからである。通常、九品官制外の者には贈官はなされないと考えられるが、鄭羲、鄭道昭と相次いで三

品の地位に登り、鄭羲の女が孝文帝の嬪、鄭羲の子の鄭懿

の女が孝文帝の皇太子の妃、広平王元懐の妃、懿の弟鄭道昭の女が北海王元詳の妃というように帝室との婚姻関係も密となった段階で追贈が行われたとする理解は可能である。また、鄭羲が父の爵を嗣いだという記述はなく、功績

によって平昌男の爵を得、ついで李冲との結びつきによって政治的な位置を高めて滎陽侯、さらに西兗州刺史に任じたときに南陽公の爵を仮されている。子の鄭懿は滎陽伯を襲爵したから、南陽公はあくまでも鄭羲に仮されたもので、鄭曄に与えられた爵の承継とは考えがたい。なお、爵について

は川本芳昭『魏晋南北朝時代の民族問題』（汲古書院、一九九八）第二編第三章「封爵制度」、大知聖子「北魏の封爵制とその実態―民族問題を中心に―」（岡山大学大学院文化科学研究科紀要）一一、二〇〇一）、將軍号については拙稿「北魏初期の將軍号」（『魏晋南北朝官僚制研究』汲古書院、二〇〇三、所収）参照。贈官については拙稿「北魏における贈官をめぐる」（『同』所収）参照。

(11) 以下、『魏書』卷五六鄭羲伝、『北史』卷三五鄭羲伝による場合は、出典を記さない。

(12) 『八瓊室金石補正』卷一五。付言すると、「枌榆」は漢の高祖の故郷豊にあった社であり、高祖が父太公のために長安に新豊を造った時、この社も移して父を慰めたという故事に基づいた表現である。

(13) 朱大涓「魏晋南北朝政界名人成才年齢結構剖析」（『六

朝史論』中華書局、一九九八、所収）参照。

(14) 後述(16)の李冲兄弟の婚姻年齢の検討を参照。なお、以下の点も判断の根拠となる。太安五年以後の結婚だとすると、李孝伯の死後三年の喪を経なければならず、鄭羲は三五、六歳となる。注(10)に記したように鄭羲の子二人は帝室に妃を出している。鄭羲の結婚後、直ちに子が生まれ、その子らが二〇歳で結婚し、直ちに女子が誕生し、その女子が、女性の結婚年齢は低いことを考慮して一五歳で妃となったとしても、太和二三年(四九九)が妃となる可能性のある最も早い年である。皇太子は太和二〇年に死去している。つまり、李孝伯の死去以前に鄭羲の結婚は成立していたと考えられる。もっとも、鄭羲のふたりの息子がともに李孝伯の女を母としていないという可能性はあり、その場合はこの推論は成立しない。

(15) 鄭羲の兄鄭洞林の曾孫鄭道邕が李憲の女と結婚し、鄭羲の兄鄭連山の曾孫鄭偉の妻が趙郡李氏であった（『文苑英華』卷九四七鄭偉墓誌銘）。また鄭羲の従父兄弟にあたる鄭白虬の孫鄭貴彦の女が趙郡の李氏に嫁している（『魏故鄭夫人墓誌銘』趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』天津古籍出版社、一九九二、二七七頁）。

(16) 李冲の一族で二〇歳前後での結婚の事例は複数ある。『魏書』卷三九李宝伝に載せられる李氏一族では没年と没年齢が記されている事例が多い。父と長男の生年が明らかになれば、父の結婚年齢の下限が判明する。その計算を行

ったところ、李沖の兄の李承が二一歳の時に長男李韶が生まれ、李沖の兄の李茂の子李静は同じく二一歳で長男李遐が生まれている。もちろん、二〇代後半、三〇代に長男が誕生している事例の方が多く、二〇歳前後での結婚が行われる事例もあるということである。

(17) 仁井田陞「六朝および唐初の身分的内婚制」(『中国法制史研究 奴婢農奴法・家族村落法』東京大学東洋文化研究所、一九六二、所収) 参照。

(18) 宋の尚書右僕射に至った鄭鮮之は、祖父の鄭襲の時に江東に居住した(『宋書』卷六四)。襲の父鄭哲の兄鄭崇の子孫が鄭羲である。宋の高平太守となった鄭琨は代々寿陽に居住していた(『梁書』卷一一鄭紹叔伝)。後述する鄭演もこの事例に含まれる。

(19) 「下碑」の「仁は義徒に結ばれ、績は寧辺に著し」がこの時期の鄭曄の活動を示す可能性があるが(注(10) 参照)、可能性にとどまる。

(20) 『魏書』卷五五に鄭演の伝が付せられている。彼の入国直後の居住地は不明。恐らく平齐民とされたであろう。その後鄭演は彭城太守となり、子孫は彭泗の地に居住したという。鄭演と鄭羲、鄭徳玄らの関係は薄かったと考えられる。

(21) 以下、pまでの東西両政権間の河東をはさんだ攻防については、宋傑『兩魏周斉戦争中的河東』(中国社会科学出版社、二〇〇六)が詳しい。

(22) 荊州奪取の目的で派遣された西魏軍は敗北、その将領たちが梁に逃れるといった一幕も見られた。

(23) 『文苑英華』卷九四七の周大將軍鄭常墓誌には「鄭頊」と作る。

(24) 鄭小白の曾孫鄭敬道は西魏で開州刺史になり、弟の鄭敬徳は北周で青州刺史に至っている。鄭偉の行動に与した可能性がある。

(25) 鄭術の墓誌が『文博』二〇〇三―一六に紹介されたが、拓片はなし。羅新・葉煒『新出魏晋南北朝墓誌疏証』(中華書局、二〇〇五) 所収の鄭術墓誌に拠った。

(26) 同時期、西魏は漢東方面への進出には成功している。

(27) 陳爽氏注四所掲書第五章参照。

(28) 『宋書』では鄭墨と作る。『資治通鑑考異』により、黒と改める。

(29) 韓樹峰氏注五所掲書八六―八七頁。

(30) 安田二郎「晋安王劉子勛の反乱と豪族・土豪層」(『六朝政治史の研究』京都大学学術出版会、二〇〇三、所収) 参照。

(31) 『資治通鑑』卷一二五には郭道隱を鄭道隱と作る。『宋書』索虜伝は郭道隱である。注五所掲の韓樹峰氏はその上で鄭氏と判断しておられるかの如くであるが、ここでは鄭氏である可能性は認められるものの、さしあたり『宋書』の記載に従っておく。

(32) ただし『梁書』によれば、鄭琨は高平太守とある。時

期は明らかではない。『宋書』卷五二垣護之伝、卷六八南郡王劉義宣伝に、孝建元年（四五四）の宋の内乱に柳元景の配下の偏帥として見える鄭琨も同一人物であろう。

(33) 注五所掲韓樹峰氏著書八七頁参照。

(34) 拙稿「魏晋南北朝における地方官の本籍地任用について」（『魏晋南北朝官僚制研究』汲古書院、二〇〇三、所収）参照。

(35) 西魏政権に加わった山東士族については、劉馳「山東士族入関房支与関隴集团的合流及其復帰」（『六朝士族探析』中央広播電視大学出版社、二〇〇〇、所収）参照。

(36) 西魏に入ってから、鄭術はその功績を賞せられて開国伯の爵を得、最後は始州刺史に至っている。

(37) 鄭氏は、南北あるいは東西両政権の中間地帯に位置していた。陳金鳳『魏晋南北朝中間地帯研究』（天津古籍出版社、二〇〇五）は、南北の中間地帯として青齊、荊州方面を扱っているが、鄭氏の根拠地帯は重視していない。

(38) 『読史方輿紀要』卷四七滎陽県条参照。

(39) 以上、『宋書』卷七四魯爽伝、卷八三宗越伝参照。

(40) 魯爽の挙兵が失敗した段階で、鄭徳玄が北魏に戻った可能性は考えられない。魯爽及び鄭徳玄が宋軍と戦った地は長江北岸に近い歴陽及びその西北ほど近い大峴、小峴である。鄭徳玄が北魏に帰したのは献文帝のはじめであるという『魏書』の記載は信頼できるであろう。

(41) 『宋書』卷八三宗越伝参照。

(42) 残る鄭濤は隴西に居住したという。

(43) 李媛華墓誌銘（趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』天津古籍出版社、一四八頁）による。

(44) 『魏書』卷五六鄭義伝、『魏書』卷九三鄭儼伝、『北史』卷三五鄭義伝。

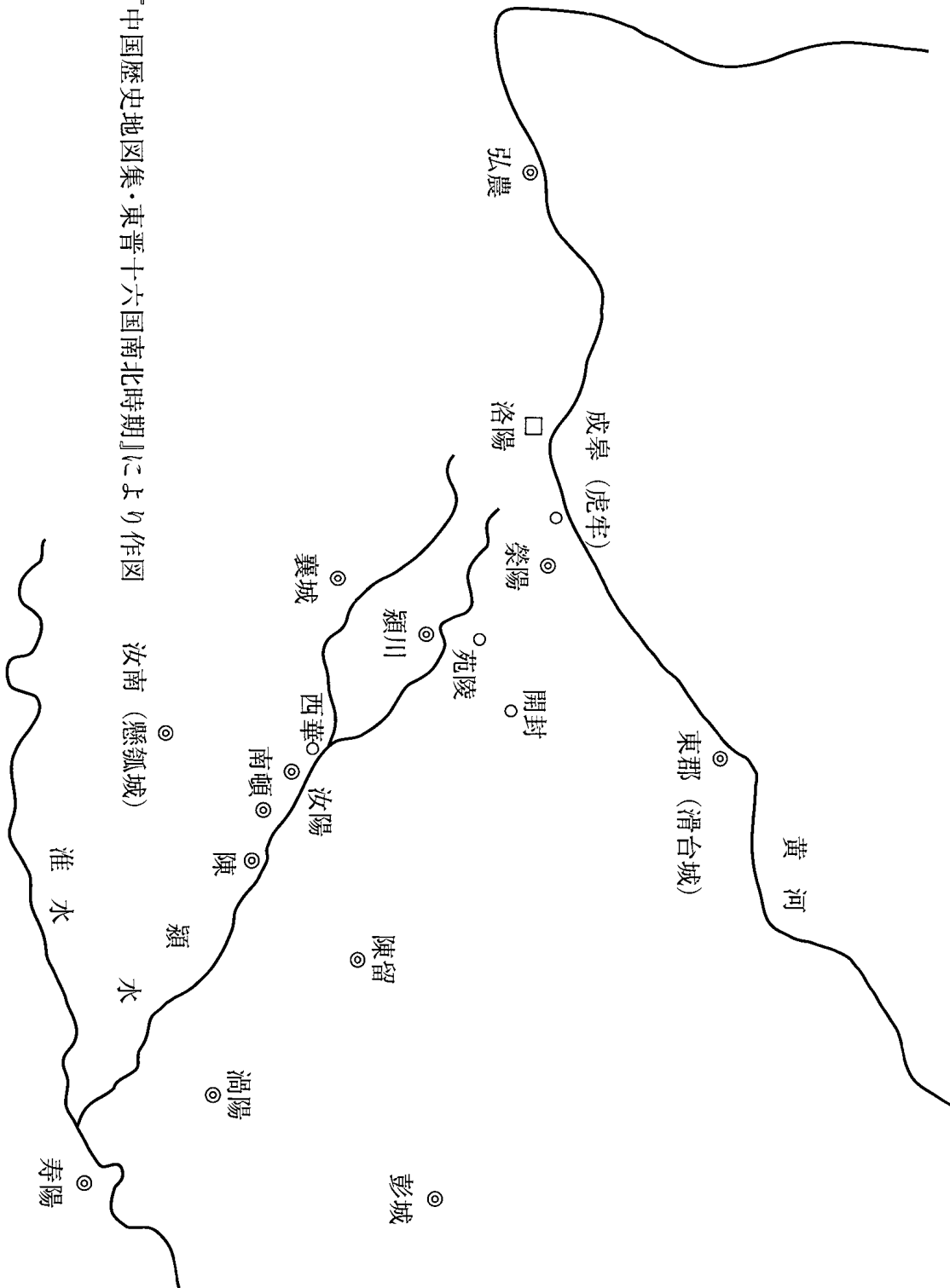
(45) 鄭義が中山王傅の時、休暇で故郷に戻ってそのまま長く勤務に復帰しなかったことは前述した。また鄭義の孫の鄭敬祖は、著作佐郎起家したと記されたあと、鄭儼の挙兵失敗時に郷人に殺されたとある。郷里に戻っていたと考えられる。

(46) 『新唐書』宰相世系表参照。

(47) 注二五前掲書所収の鄭胡墓誌。

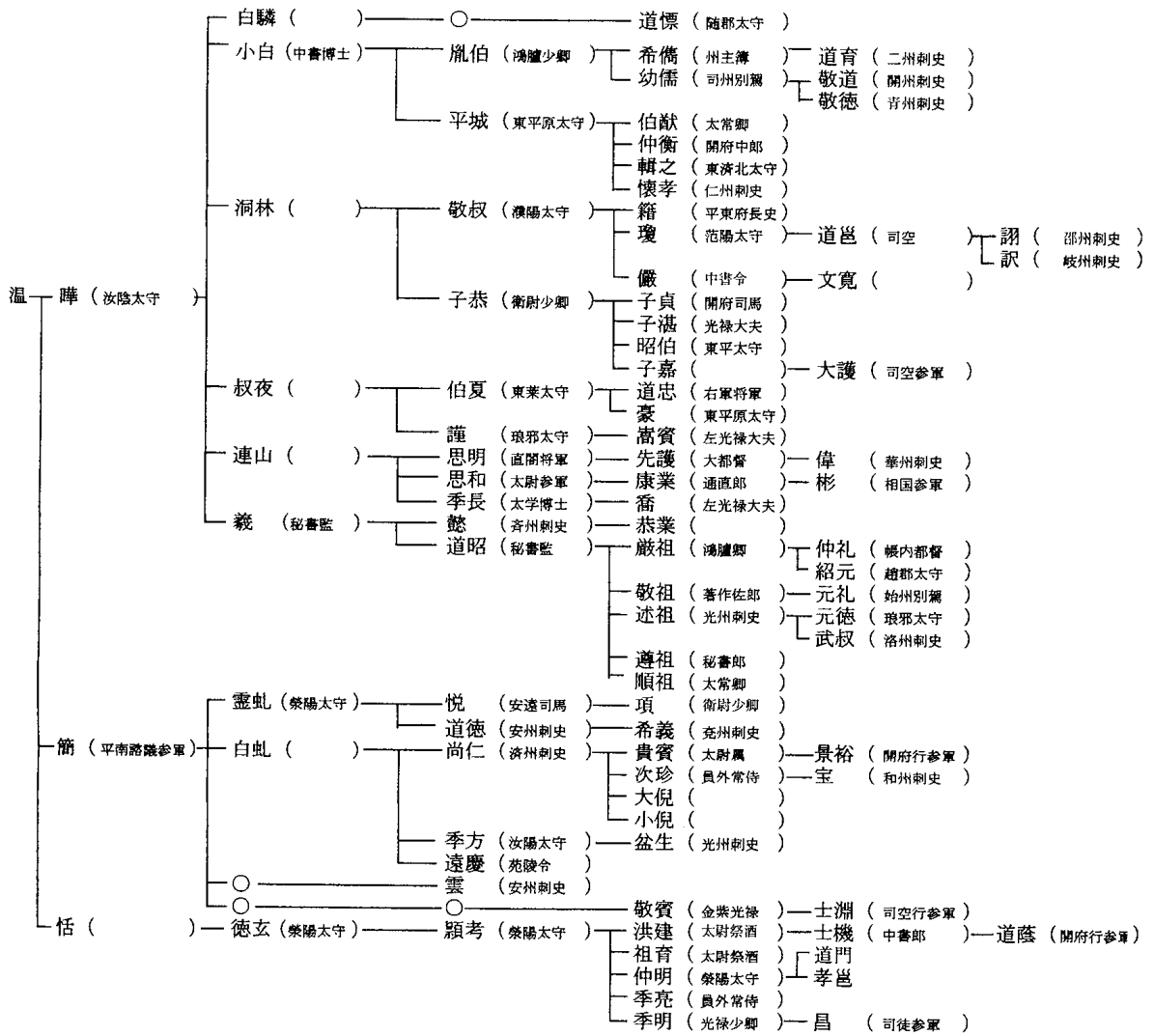
補記…本稿は二〇〇五年に上海で行われた「復旦大学百周年記念・歴史学系八十周年記念国際学術研討会」で発表した内容に一部加筆し、また体裁を少し変更したものである。お茶の水女子大学に着任した年と定年退職の年の本誌に論文掲載を許されたことを感謝したい。

鄭氏活動關係略図



譚其驥主編『中国歴史地図集・東晋十六国南北時期』により作図

鄭氏系図



() 内は最終官を示す